

仕事始め その3

朝、6:52分発の電車で、草野駅からいわき駅に出ることがある。車を使用せず、学校に行き、帰りも電車で帰ることがある。

寒い朝の遠くまで広がる田園風景を見ながら、神谷から平の町に向かって電車は走り、鎌田のトンネルをくぐると、鉄橋があり、下を夏井川が流れ、平の街並みに電車は向かうのだが、その夏井川の川岸の風景は、今年の台風が過ぎ去った時から、とてもすさんだ風景に様変わりしているのが見て取れる。

川岸の木々はなぎ倒され、木々や背の高い草の先に引っかかったゴミの山はいっまでもそのままであるし、特に、新しい草草も見えない季節なので、その惨状は見るからに異様な姿である。

10月13日の夏井川は、その川岸のコンクリートを超えんばかりの水量であった。この水が街に流れだしたらひとたまりもないと背筋が寒くなった。鎌田橋の下すれすれに大量の汚水が流れていた。

その時には、小川や平窪で、すでに川岸が決壊していたわけだから、それを差し引いてもあまりある水量であった。草野地区は、避難所が平二中に指定されていた。なぜ、いつもの通り小学校ではないのかといぶかしんだが、この夏井川が下流の河口付近にたどり着くまで、どこかの地点で川岸を超えていたなら、草野地区は一面の大海原になったことは、推察できる。そうなると、草野小学校も水につかるはずなので、高台にある平二中に避難所を開設したのかもしれないと思う。

夏井川の河口付近は、大震災の時の反省から護岸を高いところでは約5メートルぐらいかさ上げしたと聞く。実際、子どもの頃の印象とはだいぶ違い、岸からはるか下を川が流れている印象である。

ということは、そこまで行きつくまでのどこかが低くなったということでもあり、その工場の影響で、かさ上げしていないところで、川岸を水が越えたのではないかと考えることができる。

目下のところ、対症療法として、国土強靱化に3兆円の予算を組むことも結構だが、抜本的な温暖化の波をどこかで阻止しないと、同じような災害が毎年起こるかもしれないと考えると恐ろしいとも感じるのである。

地域に生きる子供たちに、地域課題を考えていく姿勢を持たせ、災害対策や少子化対策について、簡単には正解が見つからない問題を何とか解決に向けて進む意識を醸成したい。

それには、やはり、子どものころからの里山の風景と地域での思い出と人とのつながりが大きなエンジンになるのである。稲田を渡る風の涼しさや、磐城の冬ばれの日差しの暖かさを心の原点にしてもらいたい。

